書の海への旅

辻 邦生

集英社

眞晝の海への旅

一九七五年八月一〇日——一刷　一九七五年九月一〇日——二刷

定　価　九五〇円
著　者　辻　邦生
装幀者　中島かほる
発行者　陶山　巌
発行所　株式会社集英社
一〇一　東京都千代田区一ッ橋二—五—一〇　電話——(〇三)二六五—六一一一
振替——東京一五六五三
印刷所　大文堂印刷株式会社
検印廃止　0093—772010—3041
© Kunio Tsuji, Printed in Japan, 1975

目次

第一章　帆と波と風の対話　五
第二章　航路を南へとれ　七一
第三章　シレーヌたちの合唱　一三九
第四章　聖なるものの海　二〇五
第五章　眞晝の来るとき　二七一
終　章　短いエピローグ　三六一

Dies ist mein Morgen, mein Tag hebt an:
herauf nun, herauf, du großer Mittag!
——《*ALSO SPRACH ZARATHUSTRA*》——

これがわたしの朝だ。わたしの日がはじまるのだ。
さあ、のぼれ、のぼってこい、おまえ、大いなる真晝よ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

眞晝の海への旅

埴谷雄高氏に

第一章　帆と波と風の対話

Mais, ô mon cœur, entends le chant des matelots!

—— Mallarmé, 《*Brise marine*》——

裁判長殿、ならびに陪審員の皆さん。

このたびブリガンティン型帆船〈大いなる眞晝〉号で起った事件に関する陳述の機会を与えて下さったことをまず心から感謝いたしたいと存じます。裁判長はこの件について単なる事件の経過だけではなく、事件の本質を示すすべての関連的事実までも陳述するよう示唆されました。私は当法廷が〈大いなる眞晝〉号事件の意味を重視せられ、その心理的側面にまで関心を払っておられるのを見て、深い敬意を表するものであります。

と申しますのも、本事件が世間に報道されましたとき以来、つねにセンセーショナルな醜聞の要素を強調されていたきらいがあるからであります。たしかに表面的に見ますと、本事件は、無軌道な青年男女が生命知らずの冒険と道徳的に頽廃した雑居生活に突きすすんだ結果に生れたものと言われても、反論の余地がありません。私も事件に巻きこまれた（あえてそう言わせて頂きますが、これは決して本陳述を自己弁明のレヴェルに引き下げようと意図しているのでないことを信じていただきたく存じます）当事者の一人として、このような結果を招来したことに衷心から遺憾の意を表するものであります。

しかし同時に、私は、本件が犯罪的な計画性によって構成されたという主張には同じ難いのであります。

たしかに〈大いなる眞書（グローセル・ミクスター）〉号事件は私たちが自己の能力の限界を誤算した結果であったかもしれません。しかし能力の限界に挑むことによって人間が進歩してきた以上、私はそのこと自体を咎める気にはどうしてもならないのであります。裁判長ならびに陪審員各位も、私の陳述が進むにつれ、なぜ私がこんなことを申し立てているのか、了解していただけると存じます。私は自己弁明のために本件の内面的側面まで語ろうというのではなく、この事件の意味を真に理解しなければ、その犯罪性（もしそれがあるとすればの話でありますが）まで曖昧のままに終らせるだろうと思うゆえに、私は詳細な陳述をしようと考えたのであります。たしかにそのことは私自身の弁護につながるかもしれません。しかし現在、私に必要なのは私が精神的に自己救済できるかどうかであります。私は本陳述によって私自身が何を考え何をしたのか、もう一度、自らの眼で確認したいのであります。

先に行われた水夫マルセルの陳述に私が船長ベルナール・ノエと特殊な関係にあり、それが私を本件の中心人物にしていたとありましたが、これは極めて漠然とした指摘で、事件と私の関係も、事件そのものも説明しておりません。事の順序として私は船長ベルナール・ノエとどのような関係にあったか、さらに私がなぜ〈大いなる眞書（グローセル・ミクスター）〉号に乗り組むようになったか、からお話したいと思います。

すでに他の証人からも述べられましたように、ベルナール・ノエは優れた伎倆を持つ帆船操縦者でありました。私はパリに学生として滞在しておりましたとき、ベルナールと知り合ったのであります。

当時ベルナールは何か東洋的な思考に関心を抱いていたように見えました。彼が私に近づいたのも、私が日本人であったことと無関係ではありますまい。むしろ私が日本人であるゆえに、彼は積極的に私と交際し、私を彼の家――これはフランス中部にありました――に連れていったり、またブルターニュ海岸で一緒にヨットを走らせたりしたのでしょう。私は故国にいたころからヨットが唯一の趣味だったのであります。

その頃のベルナールは、どちらかと言えば、詩人肌の、物思いに沈むような気質の青年でした。体格も

痩せて、ひょろりとしていましたし、ヨットなどを帆走させていても、いかにも身体を鍛えるためにそうしているといった感じがしたものでした。

彼がフランスを離れ、どこかインドかパキスタンに行ったという噂を聞いたのは、私がまだパリにいる頃でした。あまり他人の行状を気にしないあの都市のことですから、その後ベルナールの噂はほとんど聞きませんでしたが、一、二度、彼がヒマラヤの奥で苦行をしているというまことしやかな風聞を耳にしたことがあります。その真偽は確かではありませんし、私が彼に訊ねたときにも肯定も否定もしませんでしたが、ただ、久々にパリで彼に会ったとき、私は、それがかつてのベルナール・ノエであろうか、と思わず眼を疑ったほどでした。

それは、彼が髯面になっていたとか、浅黒く日焼けしたとか、華奢な身体つきが逞しいがっしりした肉体に変っていたとかいう外面の変化ではなく（それだけでも異様なことでしたが）、何か説明のできない内面の変化が起ったにちがいない、と思わせるようなものでした。もし一人の肉体のなかに別の人格が生れることが可能だとしたら、ベルナール・ノエの場合がそれでした。彼は以前のように詩人の話をしたり、好きな詩句を口ずさんだり、ネルヴァルの一冊を持って森の奥をさまよったりしなくなりました。彼はもとはずいぶん服装にも気を遣い、何気なく着ているスエードの上着などがサン・トノレの高級品であることも珍しくありませんでした。それが、昔と違って、フランシスコ派の修道士の着るような暗褐色の長衣をまとい、質素な帯をしめていました。もちろんそれだって、おしゃれといえばいえなくもありませんが、彼は日夜それ以外のものは身につけず、最後には肘などにもつぎが当っていたのでした。

しかし彼の喋り方、挙措、態度といったものの変化に較べたら、まだ、これらの変化は説明がつくような気がします。私の記憶にあるベルナールは、非常に多弁な、明晰な喋り方をする学生でした。大地主で、かつ企業にも成功した父親の影響で、早くから古典にも親しみ、小説なども広く読んでいました。私と会った頃、彼が、スペインの神秘思想を研究するのだ、と言うのを聞いたことがあります。一種の秀才型で、

興味の対象も広く、なんでも器用にこなす才能を持っていました。

そんなベルナールが、パリで再会したとき、何とも重苦しい、言い澱みの多い、はっきりしない喋り方をするようになっていたのです。話のあいだに「えー」とか「むー」とかいう無意味な音を入れ、一所懸命に何かを言おうとするのですが、適当な言葉が見つからず、もがいている、という印象を受けました。

弁舌の爽やかな白面の美青年が、髯だらけの、武骨な、喋るたびに眼を白黒させてもがいている、得体の知れぬ人物に変ったということは、たしかに私を驚かしました。以前のベルナール・ノエは何もかもよく理解し、適切な判断を下せる、均衡のとれた、育ちのいい青年でしたが、長い東方への旅から戻ったベルナールは、何もかもわからなくなった、悩ましそうな眼をした、初老の求道者に変っていたのでした。初老というのは、ベルナールの場合、酷な言い方ですが、彼が日によって三十歳に見えるかと思うと、六十すぎの老人に見えることからも、それはごく自然な印象だったような気がするのです。

「君、いけないよ。そんなに断定しては。そうなんだよ……たしか……そうなのだ（えーむ）この世はわからない。何事も謎なんだ。謎だよ。だから、判断しちゃいけない。ぼくらは探し求めるんだ。何かをさ。（えーむ）そうしたら、いつか、きっとわかる日がくるんだ。人間が何であり、地上の生とはどんな意味があったか、それがわかるまで、何ごとも断定しちゃいけない。（えーむ）そうなんだ、断定してはいけない……」

私が彼と再会したとき、彼がそう言うのを聞き、私は奇異の思いに打たれました。ベルナールは何かを知っていたり、判断したり、意見を持っていたりするのを恐れてでもいるような様子に見えました。彼はよく長いこと自分の前の虚空にじっと見入っていることがありました。実際はただ放心していただけなのかもしれません。しかしそう言い切れない精神の集中が眼のなかに感じられました。彼は、私などには不可視の何かを、じっと見つめていたのかもしれません。あるいは、何か言葉にならぬ厖大なものを直覚していて、それを言葉にしようと、空しい努力をつづけていたのかもしれません。ともかくパリに戻ってき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たベルナールは、悩ましげに眼を見開いていた晩年のヴェルレーヌによく似ていました。彼は道のまん中に突っ立ち、何か喋ろうとして、しきりに口を開き、結局、言葉を見つけられず、また、重い思考を抱えながら歩きだすのでした。

ベルナールのこうした変り方が私たちの交友関係にもおのずと異なった形を持ちこんだのは当然ですが、といって私たちの友情が冷ややかになったわけではありません。むしろ、ある意味では、前より、私たちは親密になったと言ったほうがよかったかもしれません。それは、ベルナールが私に何もかも委ねようとする態度によって強められました。彼は深夜だろうと早朝だろうと、私の部屋を訪ねてきては、彼が思い悩んでいる未知の事柄について喋ったり、呻いたり、手を振ったりするのでした。そうした態度のなかに、私は、彼が自分や、自分に対する意識や、自分と他人を分ける意識などを切りすてようとしている様子を感じました。ある日、ベルナールと道を歩いていると、乞食の老人が彼のほうに手を差し出しました。彼はポケットをさぐり、小銭を総ざらいして乞食に与えました。それからしばらく歩いてくると、彼はたまたま突っ込んだ上着のポケットに十フラン札が一枚残っているのに気がつきました。

「しまった」彼は叫びました。「こいつがあったのを忘れていた。ちょっと戻って渡してくるから（えーむ）しばらく待っていてくれ給え」

私はそのときのベルナールの取り乱したような様子に忘れがたい印象を受けました。彼はその地方で有数の素封家の息子とは思えないような簡素な生活をしていたのであります。

彼がインドかパキスタンから戻った後、なおヨットをつづけていたかどうか、詳しくは知りませんが、少くとも私はかつてのように一緒に帆走したことはありません。北欧のレースや英仏海峡横断レースで優勝の経験のあるベルナールが、好きなヨットをそう簡単に見棄てるとは思いませんが、彼の生き方の変化とともに、帆走の機会が少くなったのは事実だったと思います。

私はそれから間もなくパリを離れ、故国に帰りました。ベルナールから時どき便りがありましたが、そ

こにも彼が海に親しんでいたことは書いてなかったように記憶いたします。当然、私は次第にヨットマンとしてのベルナールの面影を忘れると同時に、奇妙な探求者、神秘的求道者としての彼の姿を思い描くことが多くなりました。

私がこうした経緯について申しあげるのは、ベルナールから帆船〈大いなる眞晝（グローセル・ミッタータク）〉号による世界一周の大航海を計画した旨の手紙を受けとったとき、果してそれをヨットマンとしての面から考えるべきか、それとも神秘的な求道者の空想的計画と見なすべきか、判断がつかなかったからであります。

いずれ私の知るかぎり詳しくお話いたしますが、ベルナールの周辺には、昔から、不思議と人々を魅了する雰囲気が漂っておりました。これは彼が神秘的に変貌する以前から彼に備わっていた説明しがたい特質でした。しかし私にそれ以上に不思議に思えたのは、ベルナールが幼少時から一緒に育てられたフランソワ・ルクーが同じような崇拝者をまわりに集めていたということであります。現在この二人ともすでにこの世におらず、当法廷で証言できない以上、この二人の奇妙な類似について一言触れておくほうが、〈大いなる眞晝（グローセル・ミッタータク）〉号の周航計画を理解するうえに、何かと便利であると思うのであります。

私がフランソワに会ったのは森に囲まれたベルナールの故郷の家に連れられたときでした。フランソワの父はノエ家の執事を務めており、ノエ家の広大な所有地のまん中にある十八世紀の城館と付属の二、三の建物（酪農工場として使用されておりました）の管理に当っておりました。フランソワがベルナールと幼少時を共に送ったというのは、主としてベルナールが復活祭や夏の休暇を故郷で過すときの、遊び友達としてだったのです。

私はベルナールの部屋でこの二人の幼少期のアルバムを見せて貰いましたが、ベルナールが眉をしかめ、生真面目な表情をしているのに対し、フランソワは大抵は愉しそうに笑顔を見せていたように思います。幼少期の写真にも、すでにフランソワは顔立ちの整った利口そうな子供に写っておりましたが、私が会ったとき（彼もパリで学生生活を送っていたのです）フランソワは明るい青い眼をした実に好ましい顔の青

年でした。フィディアスがモデルに選んだアテネの若者はこんなでもあったろうかと思うような、端正な、高貴な様子をしておりました。

それに較べると、ベルナールは時どき髪をくしゃくしゃにし、腫れぼったい眼をしていて、何かに気をとられたように放心していました。たしかアルバムのなかでもベルナールのほうが無造作な服装をしていましたが、フランソワはつねに晴着を着て写っていました。おそらくフランソワの母親が、ノエ家のアルバムに残る自分の息子の姿を、そうした名誉にふさわしい服装で飾らせようとしたのかもしれません。後になってベルナールが神秘的なものに暗い情熱を向けるようになると、フランソワは気遣わしげな様子で、つねに彼に付き添うようにしていたのであります。

学部も違い、住む場所も違ったのに、二人はまるで見えない紐で結ばれているように、いつも一緒にいるような印象を与えました。ベルナールがヨットに熱中したとき、当然そこにフランソワの姿が見られたのでした。二人は兄弟とも友人とも違った不思議な組合せでした。それは一人の人間をむりやり二つに別けたような、そんな感じを私に味わわせました。二人は単にうまく気が合っているというのではなく、まるで人と影とが離れられないような具合に一体だったのであります。

私はよく考えたものですが、これはベルナールがフランソワに合わせたのか、それともフランソワがベルナールと一つになろうとしたのか、どちらだったのでしょうか。二人とも個性のつよい、自分を曲げぬ性格であったことを思うと、この二人の結びつきは私などには理解できかねるものを持っていたのでした。ただフランソワの印象を率直に言えば、あくまでベルナールという鋳型から打ち出された金貨という感じがしました。フランソワはベルナールの真似をしていたのでしょうか。それとも二人がながいこと一緒にいたためにどちらからともなく似ていったのでしょうか——このことを考えると、私は、よくフランソワがごく平静な表情で「すべては空しく、すべては解りきっているんだよ」と言っていたのを思いだすのであります。

「そんなことを言うと、人間はもう何もやる気がなくなるんじゃないのかい？」
私はいつかフランソワにそう訊いたことがあります。彼は明るい青い眼を眩しく顰めるように細めながら答えました。
「いや、そんなことはない。すべてが解りすべてが納得された以上、人間にはすべてが許されているんだよ。ただふつうの人間にはそれができないだけなんだ。しかし真にすべてが解った人間は、同時にすべてをなしうる勇気と能力を手に入れるんだ。そういう人間は、焼けた火箸を握ることもできるんだ。顔色一つ変えないでね」
私はこうした言葉に青春特有の反抗的な響きを感じましたが、同時にどこかにベルナールに対して必死で逆らおうとする彼の身ぶりをも感じたのであります。
ベルナールが帆船による世界周航を計画したとき、フランソワ・ルクーが当初からそれに加わっていたかどうか、正確にはわかりませんが、以上の事情を考慮に入れてみると、二人は共同で船の買入れやら艤装やら乗組員の選択やらをやったのではないでしょうか。しかし実際問題としてその辺のところは私には十分にわかりかねるのであります。本事件に何か曖昧な部分があるとしたら、まさにその点であろうと思われます。
ベルナールからの手紙で、私は、この周航計画が彼にとって極めて真剣なものであり、それまでの彼の思索や生活の総決算になるものであることはわかったのであります。たしかにこの件についても何度か私は手紙を貰いました。彼は「地上のものは未知なのだ。ぼくらは敬虔になるべきだ。物象の前で膝を屈しなければならぬ」という意味のことを繰り返して書いていました。むろん航海に関する具体的な計画についても触れており、なお幾つか彼が考えたプログラムも示されていたのです。たとえば彼はケープ・タウンをまわり、印度洋を航行したのち、東南アジアに入ったら、そこで何とか私に参加してもらえまいか、と書いてきたりしたのであります。

これは本件に関してかなり重要なことでありますが、ベルナール・ノエの当初の計画では、〈大いなる眞書〉号は日本へ寄港する予定はなかったのであります。その証拠に、彼の最初の手紙では、私がシンガポールまで飛行機で行くことを要請しております。彼はシンガポールから北太平洋へ北上する意図はなく、オーストラリアをまわってシドニーまで南下し、そこから偏西風帯である南緯四十度線へ突入し、一挙にケープ・ホーンへ向う計画だったのであります。つまり本事件の起った南太平洋の航路は当初は計画外のものであり、それはいわばシンガポール以後の偶発事が、次々と運命的な必然となって生みだしていった結果にほかならないのであります。

もっともそれ以前から〈大いなる眞書〉号に奇妙な風聞が纏わりついていたのは事実です。これはまだ誰からも証言されておりませんので、あえて発言いたしますが、ベルナールがこの世界周航の計画を発表すると間もなく、パリとロンドンの大衆夕刊紙がこれを大きく取りあげ、この航海は人間の拘禁状態における男女の心理や性的関係の変化を記録する実験的漂流である、と書きたてたのでした。

この新聞記事がかなりセンセーショナルだったため、そんな計画には参加できないと言って乗組みを断った女性がいたとか聞いています。さすが男のほうには不参加を申し出た者はなかったようですが、もし本当にベルナールの意図が新聞に暴露されたごときものであるなら、なぜはじめからそれを仲間に言わなかったのか、という不満の表明はあったのでした。

しかしこの新聞の記事に最も憤慨し、最も迷惑を蒙ったのは当のベルナールではなかったでしょうか。彼の意図はとくに明確な言葉で言われるようなものではありませんが、少くとも、男女の拘禁状態の心理的実験など考えてもいなかったのです。たしかに帆船で航海し、その狭い船中に若い男女を乗せれば、日常生活と異なる何らかの変化が生れるだろうというのが世間一般の人々の見解であります。

ベルナールが腹を立てたのは、心理的実験ということではなく、世間一般の誤解の上に乗ろうとしたこの種の新聞記事の書き方に対してだったと思います。

しかし考えようによれば、ベルナールの意図に何か判然としないところがあり、帆船による世界周航という風変りな計画を十分に説明し切れなかった以上、この種の誤解が入りこんできたのも仕方がなかったかもしれません。皮肉なことには、ベルナールや乗組員(クルー)たち、それに帆船そのものまで写真入りで大衆週刊誌にも取りあげられた結果、かえって一般から参加志望者の手紙が殺到したということであります。これはベルナールから私が直接聞いた話でありますし、当時の新聞雑誌類がこの事実を十分に裏づけてくれると信じております。

いまでも不思議なのは、なぜベルナールがそれに抗議して、徹底的に航海の意図や計画を明瞭に表明しなかったか、という点です。当時のインターヴィュを読んでみてもベルナールの言葉にはヴェールを掛けたような感じがあります。彼はただしきりと「地上の未知なるものを求めるのだ」と言うだけなのです。「性の領域も未知なものではないか」という記者の質問にもベルナールは「その通りです」と答えているだけなのです。だが、なぜ最も誤解を受けやすいこの点を、もっとはっきり説明しておかなかったのでしょうか。また彼がブリガンティン型帆船につけた〈大いなる眞晝(グローセル・ミクタグ)〉号という名称が何となくいわくありげに見え、無軌道な若者たちが既成道徳に反抗するようなポーズを示すものと受けとられたのも事実だったと思います。

ともあれ、〈大いなる眞晝(グローセル・ミクタグ)〉号の周航計画に対するこうした故意に歪められた情報がどこから出たのか、どんな具合のデータをもとに人々がそれを納得したのか、ついに分らずじまいに終りました。

果してこの誤報が本事件と関係があるのかないのか私には決定する根拠がありません。ただ私が申しあげたいのは、ベルナール・ノエが受けた非難のうち、南太平洋の航路を選んだこと、また既成道徳の否認に青年男女を誘いこんだこと、という二点については、まったく理由のないものだということです。それは彼がやむを得ず蒙った災難のごときものであります。それさえなければ彼は帆船を無事ケープ・ホーンに向け、マゼラン海峡を越えていたのかもしれないのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com